

[3] *janapada* の背後にあるもの

[0] まず '*janapada*' から検討しよう。

上記のように '*janapada*' は「人々」を意味する '*jana*' と、「足」を意味する '*pada*' という2つの語が合成してできた言葉である。直訳すれば「人々が足を踏み入れたところ」ということになる。「足を踏み入れた」というのは、「開墾された土地」「人々が住む土地」ということであって、したがって荒野を開拓して人が定住するようになれば、新たに '*janapada*' ができることになり、もし何らかの理由で荒廃に帰せば '*a-janapada*' になる。

しかしながら一般的な '*janapada*' は子々孫々に伝えられて、その土地なりの生活習慣や風習が形成されていたものと考えられる。要するに '*janapada*' とは *cultivate* されたところであって、そこにはそこの *culture* が形成されていたということになる。

また「人々」は不特定多数の人間をいうが、釈尊時代のインドは一人一人の独立した個人が自由に動き回り、移住する環境にはなく、もし移住するにしても家族や部族・氏族単位の集団的なものであったであろう。したがって多くのジャナパダは、「部族」や「氏族」の人々が子々孫々にわたって暮らしてきた土地ということになる。

以下にはこのような '*janapada*' という言葉の背後にあるものを検討することにしよう。

[1] ジャナパダにはそれぞれ大なり小なりの独自の文化があった。それは上述したジャナパダの原義を考えれば当然のことである。

[1-1] ジャナパダを形成する文化の一つとして言語があげられる。これを示すのが合成語「ジャナパダの言語 (*janapada-nirutti*)」である。

ジャナパダの言語に執着してはならない (*janapadaniruttiṃ nābhiniveseyya*)。通称を過剰に用いてはならない (*samaññaṃ nātidhāveyya*) というのは、同一の容器であってもそれぞれのジャナパダでは (*ekaccesu janapadesu*)、パーティ (*pāti*) と呼ばれ、あるいはパッタ (*patta*)、ヴィッタ (*vittha*)、サラヴァ (*sarāva*)、ダーローパ (*dhāropa*)、ポーナ (*poṇa*)、ピシーラ (*pisila*)⁽¹⁾ などと呼ばれる。そのように各地の言語があるにもかかわらず、ある呼び方に固執して「これのみが真実であって (*idam eva saccaṃ*)、他は虚妄である (*mogham aññaṃ*)」と主張するのではなく、ある呼び方で呼んでいるのだと捉えるなら、ジャナパダの言語に固執せず、通称を過剰に用いないことになる。[要旨] *MN.139 Araṇavibhaṅga-s.* (「無諍分別経」 vol. III p.234)

隨国俗法莫是莫非者。此何因説。云何隨国俗法是及非耶。彼彼方、彼彼人間、彼彼事。或説「𣵀」、或説「𣵁」、或説「𣵂」、或説「𣵃」。如彼彼方、彼彼人間、彼彼事。或説𣵀、或説𣵁、或説𣵂、或説𣵃、彼彼事隨其力。一向説此、是真諦餘者虚妄。如是隨国俗法是及非也。『中阿含』169「拘樓瘦無諍経」(大正01 p.703上)

とされている。

このような仏教の考え方が、「比丘たちよ、仏語を聖語に転じてはならない (*na bhikkhave buddhavacanaṃ chandaso āropetabbaṃ*)。[聖語に] 転ずる者は突吉羅罪である。比丘たちよ、各自の言語で仏語を学ぶことを許可する (*anujānāmi bhikkhave sakāya ni-*

ruttiyā buddhavacanam pariyāpūṇitun) 」 (2) というような教えにつながるのであると考えられる。

ともかくジャナパダにはそれぞれの「ジャナパダの言語」すなわち「お国言葉」というものがあるとされているわけであって、このことはインドの州が主に言語によって分かたれているということに通じる。そういう意味では、インドの州はジャナパダという発想で分割されていることになる。またインドには約 12 の主要言語と約 753 の方言がある (3) などといわれていることを考えれば、以上のことは十分に納得することができる。

- (1) 参考のために、水野弘元『増補改訂 パーリ語辞典』に上げられている訳語を紹介しておく。
pāti = 「鉢、茶碗」、*patta* = 「鉢、器」、*vittha* = 「椀、小椀、容器」、*sarāva* = 「コップ、台皿」、*dhāropa* = 「杵、湯のみ」、*poṇa* = 「傾斜の、坂の、傾いた」、*pisīla* = 「飲食器、鉢」である。ただし *poṇa* の訳語はこの場合の訳語としては不適當である。また片山一良訳『パーリ仏典 中部後分五十篇 II』(大蔵出版 2002) p.258 ではパーティ(茶碗)、パッタ(鉢)、ヴィッタ(椀)、サラヴァ(台皿)、ダーローバ(皿)、ポーナ(瓶)、ピシーラ(盥)と訳され、勝本華蓮訳「第 139 経 心が乱れない生き方—無諍分別経」(中村元監修/森祖道・浪花宣明編集『原始仏典第 7 巻 中部経典 IV』春秋社 2005) p.473 ではパーティ(碗)、パッタ(鉢)、ヴィッタ(うつわ)、サラヴァ(皿)、ダーローバ(平なべ)、ポーナ(つぼ)、ピシーラ(たらい)と訳されている。

- (2) *Vinaya* 「小事毘度」(vol. II p.139)。四分律「雜毘度」(大正 22 p.955 上) 参照。なお *Samanta-pāsādikā* に「『聖語に転ずる』とは、ヴェーダと同様に、尊ばれる言語によって語路を示す、である (*sakkatabhāsāya vācanāmaggaṃ āropema*)。『各自の言語で』とは、ここに各自の言語というのは、等正覚者が用いた類のマガダ語である (*sammāsambuddhena vuttap- pakāro māgadhiko vohāro*)」(vol. VI p.1214) とある。さらに釈尊が用いられた言語については、前田恵学『原始仏教聖典の成立史研究』(山喜房仏書林 1964) p.095 以降を参照。

- (3) コーサンピー著・山崎利男訳『インド古代史』p.058 を参照。

[1-2] ジャナパダには独自の生活慣習があるともされている。

[マハー・カッチャーヤナ (*Mahā-Kaccāyana*) に出家具足戒を授けられた弟子のソーナ・クティカンナ (*Soṇa-Kuṭṭikanna*) が世尊のもとを訪れ、世尊に告げて] アヴァンティ南路 (*Avantidakkhiṇāpatha*) では羊皮 (*eḷaka-camma*)、山羊皮 (*aja-camma*)、鹿皮 (*miga-camma*) を敷具にします。ちょうど中央の諸ジャナパダにおける (*majjhimesu janapadesu*) エーラグ (*eragu*)、モーラグ (*moragu*) (1)、マジヤール (*majjhāru*)、ジャントゥ (*jantu*) のような草類 (2) に相当します、と説明して、毛皮使用の許可を願い出た。[要旨] *Vinaya* 「皮革毘度」(vol. I p.195)

阿濕婆阿盤提国……伊犁延陀耆羅耆羅毘毘如是。阿濕婆阿盤提国以皮爲臥具。殺羊皮白羊皮鹿皮。願世尊聽得畜皮臥具。『四分律』「皮革毘度」(大正 22 p.845 下)

東方国土用如是麻褥覆毛褥覆華衣褥覆。願佛聽此国土(阿濕摩伽阿槃地国土)比丘皮作褥覆羊草鹿草殺羊草。『十誦律』「皮革法」(大正 23 p.181 下)

国内地土。極爲堅硬牛行躡地足迹。日曬乾已。人行不得。不同餘国。国法復用如是臥具。所謂羊毛羊皮。鹿牛殺羊等皮。以爲臥具。『根本有部律』「皮革事」(大正 23 p.1052 下)

釈尊時代の仏教の中心地であったガンジス河中流域地方と、アヴァンティ南路すなわちデカン高原とでは、敷き具にする素材が異なっているということであるが、その背景にはもち

ろんそれぞれのジャナパダは気候や風土が異なり、植生や生息する動物も異なるということがあったのであって、それに基づく生活習慣にも違いがあったのは当然であろう。このようにジャナパダは風習や気候・風土などに密接な関係がある概念ということが出来る。

なおアヴァンティ南路の地について言えば、上記のパーリ律蔵には「アヴァンティ南路では地面が黒く、堅く、[牛の蹄に踏みつけられて生じた] “牛の棘 (でこぼこのこと)” によって害われている (*kharā gokaṇṭakahatā*)」⁽³⁾と記されていて、この地が牧畜を盛んとしているために大地が堅く、せいぜい低木が繁る程度の草地の広がる地域として描かれている。さらに「アヴァンティ南路では人々が洗浴に重きをなし、水で [砂塵を] 洗い落としている (*nahānagarukā manussā udakasuddhikā*)」⁽⁴⁾とも語られていて、この地が砂埃の舞う乾燥地帯で、洗浴の欠かせない地域であったことを思わせる。これに対応する漢訳でも小石が多く、緑の乏しい地域であることをうかがわせている⁽⁵⁾。

これに対して中央のジャナパダでは農耕を中心とした田畑が広がり、灌漑施設の整えられた、水や緑の豊かな地域であったと推定される⁽⁶⁾。

このように中央のジャナパダとアヴァンティ南路のようなジャナパダでは自然の地勢や気候風土も異なり、自ずと敷具として使用する素材にも差異が生じた。そこで、そこに住む人々の生活文化の上でもさまざまな相違が生じたのである⁽⁷⁾。

- (1) *Samanta-pāsādikā* (vol. V p.1088) には「モーラ草は赤銅色の穂を有し、軟らかく心地よい触感である (*moragūtiṇaṃ tamba-sisaṃ mudukaṃ sukha-samphassaṃ*)」とあるので、蒲 (がま、学名 *Typha latifolia* L.) と推定される。この植物は「ガマ科の多年草。大形の湿生植物で、池や川の縁など淡水域の泥地に群生する。……果穂を集めたものを蒲綿 (ほわた) といひ、ふとんの綿としたり火打石の火口 (ほくち) として使った。また葉や茎から簾 (すだれ) や蓆 (むしろ) をつくった」(『小学館 日本大百科全書』[CD-ROM 版] の「ガマ」の項目参照) とされている。
- (2) *Samanta-pāsādikā* (vol. V p.1088) には「‘エーラグ、モーラグ、マッジャーラ、ジャントゥ’とは、これらは4つの草の種類である。これらで蓆の芯や蓆 (こぎ) を作る (*eragu moragu majjhāru jantū ti imā catasso pi tiṇajātiyo : etehi kaṭasārake ca taṭṭikāyo ca karonti*)」とある。
- (3) *Vinaya* 「皮革鞣度」(vol. I p.195) なお *Samanta-pāsādikā* (vol. V p.1088) を参照。
- (4) *Vinaya* 「皮革鞣度」(vol. I p.196)
- (5) 『四分律』「皮革鞣度」(大正 22 p.845 中) 「阿濕婆阿盤提国、多諸刺棘瓦石」、『十誦律』「皮革法」(大正 23 p.181 下) 「阿濕摩伽阿槃地国土。地堅碎石多土塊多」、『根本有部律』「皮革事」(大正 23 p.1052 下) 「国内地土。極爲堅硬牛行躡地足迹。日曬乾已。人行不得」などとある。
- (6) マガダ等のガンジス河中流域におけるジャナパダの地勢については、本論文【6】 [1] p.152 の註 (1) を参照。
- (7) 本用例以外にも気候風土による差異として種々の事柄が挙げられるであろうが、例えば靴 (履物) について、『梵文根本有部律 II』「皮革事」(vol. II p.178) では、世尊が寒冷地ハイマヴァタの諸ジャナパダで (*Haimavateṣu janapadeṣu*)、「プラー (pūlā、富羅)」という短靴の着用を許可されている。プラー (pūlā、富羅) とは短靴のことである。本論文【4】 [5] [5-4] p.122 の註 (1) を参照。

[1-3] さらにジャナパダには独自の風習があるともされている。

[世尊がヴァーセッタに説かれて] ……耕さなくても自然に熟する米を食すると、や

がて男女の相が現れた。そのうちにある一組の男女が愛欲のとりことなり、交會を行つた。これを見た人々が彼らに泥 (*pamsu*) や灰 (*setṭhi*) や牛糞 (*gomaya*) を投げて追放した。あるジャナパダにおいては (*ekaccesu janapadesu*) 今でも人々が花嫁 (*vadhū*) を連れ出して、ある者は泥を投げ、ある者は灰を投げ、牛糞を投げる。それは大昔の、世界の起原と認められた不滅のもの (慣習) に従っている。……交會を行つた者は、1ヶ月あるいは2ヶ月の間、ガーマあるいはニガマに入ることを許されなかった。彼らは、かの不道徳を隠蔽するため小屋に入った。[要旨] *DN.027 Aggañña-s.* (「起世因本經」 vol.III p.088)

とされている。このようにジャナパダには地域の伝統として、独自の風習も形成されていたのである。

[1-4] また独自の祭式 (葬送儀礼) が執り行われているということもジャナパダがジャナパダである所以となる。

[世尊が比丘たちに告げられて] 南方の諸ジャナパダに (*dakkhiṇesu janapadesu*)、ドーヴァナ (*dhovana*、洗滌) と名づける [祭式が] ある。そこでは食物、飲物、硬い食べ物、軟らかい食物、舐める食物、飲む食物、舞踊、歌謡、音楽が用意されている。*AN.010-011-107* (vol.V p.216)

ドーヴァナ (*dhovana*、洗滌) という祭式は南方の諸ジャナパダで伝統的に行われたもののように、土葬された遺骨を洗浄するという葬送儀礼である。註釈書 *Manoratha-pūraṇi* によれば「『ドーヴァナ (洗浄)』とは、骨の洗浄である (*dhovanan ti aṭṭhidhovanam*)。それら [南方の諸ジャナパダのうち] そのジャナパダでは、親族の死者たちを火葬にしない (*tasmiñ hi janapade manussā nātake mate na jhāpenti*)。穴を掘って、大地に [遺体を] 埋葬する (*āvāṭam pana khaṇitvā bhūmiyaṃ nidahanti*)。ときにその腐敗した遺体の骨を取り出して [洗浄し] 順次 [その骨を高い所に] 上げて、香や華鬘を以て供養して安置する (*atha nesam pūtibhūtānaṃ aṭṭhīni nīharitvā paṭipāṭiyā ussāpetvā gandhamālehi pūjetvā ṭhapenti*)。祭日に至ると、その骨を [手で] 持って泣き悲しんで、それから祭式を執り行なう (*nakkhatte patte tāni aṭṭhīni gahetvā rodanti paridevanti, tato nakkhattaṃ kilānti*)」 (vol.V p.071) とされている。

なお「ドーヴァナ (*dhovana*)」の記述は、*Sumaṅgala-vilāsini* (vol. I p.084) や *Mahāniddeśa* の *Aaṭṭhakathā* (vol. II p.392) にも見られる。

[1-5] 以上のように、ジャナパダは部族の人々の住む土地であって、多くのジャナパダは子々孫々にわたって継承されたから、そこには独自の言語があり、独自の生活慣習があり、独自の風習があり、独自の祭式があった。すなわちそれぞれのジャナパダにはそれぞれの文化が形成されており、だからこそジャナパダと叫ぶということになる。

[2] ジャナパダは部族の人々が住み生活する、自然に形成された文化的な空間であって、けっしてラッタのような王の支配を語源とする政治的・人為的な背景を持つ言葉ではない。そこでジャナパダは、一つの文脈の中で当時のインド人の生活と密着した事項とともに語られる。必ずしもジャナパダの語義と直接に関係するわけではないが、ジャナパダの背後にあるものとしてその用例を紹介し、若干の考察を加えてみたい。

[2-1] まずジャナパダという言葉は、ヴァルナすなわちバラモン (*brāhmaṇa*)、クシャトリア (*khattiya*)、ヴァイシャ (*vessa*)、シュードラ (*sudda*) などのさまざまな階層の人々が登場する文脈の中で使われている⁽¹⁾。

[譬喩] ある人がジャナパダ第一の美人 (*janapada-kalyāṇī*) を求めていたので、人々が彼に「その美人はクシャトリア女なのか、バラモン女なのか、ヴァイシャ女なのか、シュードラ女なのか (*janapada-kalyāṇiṃ khatti vā brāhmaṇi vā vessi vā suddi vā*)」⁽²⁾ と、あるいは[彼女の] 名前 (*nāma*) や氏姓 (*gotta*)、あるいは[背が] 高いか、低い、中背であるのか、あるいは[その] 皮膚の色は青黒いか、真黒であるか、黄金色であるのか (*dīghā vā rassā vā majjhimā vā, kālī vā sāmā vā maṅgura-cchavi vā*)⁽³⁾ と尋ねるが、彼は「知らない」と答えるだろう。[要旨] *DN.009 Poṭṭhapāda-s.* (「布吒婆樓經」 vol. I p.193)、*DN.013 Tevijja-s.* (「三明經」 vol. I p.241)、*MN.079 Cūlasakuludāyi-s.* (「善生優陀夷小經」 vol. II p.033)、*MN.080 Vekhanassa-s.* (「鞞摩那修經」 vol. II p.040)

佛告梵志。如有人言。我與彼端正女人交通。稱讚姪女。餘人問言。汝識彼女不、爲在何處東方西方南方北方耶。答曰。不知。又問。汝知彼女所止土地城邑村落不。答曰。不知。又問。汝識彼女父母及其姓字不。答曰。不知。又問。汝知彼女爲利利女、爲是婆羅門居士首陀羅女耶。答曰。不知。又問。汝知彼女爲長短麤細黑白好醜耶。答曰。不知。云何梵志。此人所說爲誠實不。答曰。不也。梵志。彼沙門婆羅門亦復如是。無有真實。『長阿含』028「布吒婆樓經」(大正01 p.111下)、『長阿含』026「三明經」(大正01 p.105下)、『中阿含』208「箭毛經」(大正01 p.784下)、『中阿含』209「鞞摩那修經」(大正01 p.786中)

ここからは、当然のことであるが、ジャナパダに住む人々の中には、クシャトリアもバラモンもヴァイシャもシュードラも、さまざまな階級の人が含まれていたことがわかる。なおバラモン文化圏と仏教文化圏とではバラモンとクシャトリアとの順番が前後していて、この文献にも見られるように、仏教文化圏ではクシャトリアの位置づけが上位にあることはしばしば指摘されているところであり⁽⁴⁾、クシャトリアがこの地域圏で果たしていた役割の重さをうかがわせている。

しかしジャナパダはそれぞれ独自の文化を有するところをいうのであるから、ジャナパダによっては、四つの階級によって構成されていないジャナパダもあったことが知られる。

[世尊がアッサラーヤナに告げられて] ヨーナとカンボージャおよび他の辺境の人々の諸ジャナパダには (*Yona-Kambojesu aññesu ca paccantimesu janapadesu*)、ア・リヤ (*ayya*、主人) とダ・サ (*dāsa*、奴隸) との2階級だけが[住んで] いて (*dve va vaṇṇā, ayyo c' eva dāso ca*)、しかも先にはダ・サであって、後にア・リヤとなる者もある、と (*ayyo hutvā dāso hoti, dāso hutvā ayyo hoti ti*)。 *MN.093 Assalāyana-s.* (「阿摂想經」 vol. II p.149)

『中阿含』151「阿摂想經」(大正01 p.664上)：世尊告曰。……摩納。頗聞餘尼及劍浮国有二種姓。大家及奴。大家作奴奴作大家耶。

『梵志頌波羅延問種尊經』(大正01 p.877上)：佛言。若見世間人善家子爲人作奴。奴反免爲人作子不。頌波羅延白佛言。我聞月支国中有是。

このように、インド的な伝統に乏しい辺境のジャナパダには、人々の社会階級面からいっ

でも独自のものがあつたのである。

- (1) コーサンピー著・山崎利男訳『インド古代史』pp.126~127、中村元『インド古代史(上)』p.085以降参照。なお『国家の起源と伝承』(p.058)では「階層の差が明確化し職業の専門化が始まるとともに、アーリヤの成員はバラモン、クシャトリヤ、ヴァイシャの3階層によりはっきり分けられるようになった。またシュードラの階層には、排除された氏族や下等視される職業に従事する者など、雑多な集団が組み込まれた」という。ロミラ=ターバル博士は、ヴァルナは初期の文献(リグ・ヴェーダ)にはアーリヤ=ヴァルナとダーサ=ヴァルナという二区分として現れるが、やがて社会構成を秩序づけるための制度となったと、その経緯を述べている。『国家の起源と伝承』pp.056-058を参照。
- (2) 対応する漢訳『長阿含』026「三明経」に「刹利女……婆羅門・居士・首陀羅女」とあり、『長阿含』028「布吒婆樓経」と同文であるが、『中阿含』208「箭毛経」と『中阿含』209「鞞摩那修経」には「刹利女。……梵志・居士・工師女」とある。パーリ文のクシャトリヤ女とバラモン女は上記の『長阿含』と『中阿含』にそれぞれ「刹利女」・「婆羅門[女]」あるいは「梵志[女]」とあつて対応するが、シュードラ女を『長阿含』の「首陀羅(Skt. *sūdra* の音写)[女]」とするのを除いて、『長阿含』と『中阿含』の「居士[女]」とあるのはヴァイシャ女ではなく、ガハパティ女(*gahapatāni*?)とでもあつたのか。また、ヴァイシャ女は『中阿含』の「工師女」に対応するとすれば、『中阿含』の原典にはシュードラ女がなかつたということになるか。因に、荻原雲来編纂・辻直四郎監修『梵和大辞典』(p.1285)の *vaiśya* の項目に「工師」という漢訳が挙げられている。なお当時の農村社会の中心的存在であつたガハパティ(*gahapati*)、すなわち居士は「ヴァイシャ・シュードラいずれのヴァルナに属していたかは明らかではない」という。山崎元一『古代インド社会の研究』p.184を参照。
- (3) 対応する漢訳『長阿含』026「三明経」に「汝知彼女爲長短麤細黑白好醜耶」とあり、『長阿含』028「布吒婆樓経」と同文であるが、『中阿含』208「箭毛経」と『中阿含』209「鞞摩那修経」には「爲長短麤細。爲白黒。爲木白木黒」とある。
- (4) 中村元『インド古代史(上)』p.183、山崎元一『古代インド社会の研究』p.182を参照。

[2-2] またジャナパダには、もちろんのことながら、さまざまな職業の人々が生活していた。

[世尊がクータダント婆羅門に語られたマハーヴィジタ王(*Mahāvijita rājan*)の過去世物語のなかで、その王に招聘された顧問官の婆羅門(*purohita brāhmaṇa*)が進言して] 王のジャナパダに(*rañño janapade*)いる、町と地方の住人である(*negamā c'eva jānapadā ca*)クシャトリヤの随侍者たち(*khattiyā anuyuttā*)、……大臣や侍臣たち(*amaccā pārisajjā*)、……大富豪なる婆羅門(*brāhmaṇa-mahāsāla*)⁽¹⁾、……富裕なるガハパティたち(*gahapati-necayikā*)⁽²⁾、その人々に、尊き王は[『大いなる供犠祭(*mahāyañña*)を行なう』と]告げなさい。[要旨] *DN.005 Kūṭadanta-s.* (「究羅壇頭経」vol. I p.136)

[上記と同様、顧問官の婆羅門がマハーヴィジタ王に進言して、盗賊などの危難を取り除くために] 尊き王のジャナパダにおいて(*rañño janapade*)、農耕や牧畜に適する者たちには(*kasi-gorakkhe*)種子や食物を与えて下さい。……商売に適する者たちには(*vaṇijjāya*)資金を与えて下さい。……官職に適する者たちには(*rāja-porise*)食物と賃金(俸禄)を準備して下さい。これら自分の家業に専念する人々は⁽³⁾、王のジャナパダを悩まさないだろう。*DN.005 Kūṭadanta-s.* (「究羅壇頭経」vol. I p.135)

『長阿含』023「究羅檀頭經」（大正01 p.098下）：時彼大臣即白王言。……諸近王者當給其所須。諸治生者當給其財寶。諸修田業者當給其牛犢種子。使彼各各自營。王不逼迫於民則民人安隱養育子孫共相娛樂。

また次のように、ジャナパダの人々は職業に対する貴賤観も持っていたようである⁽⁴⁾。

職業に卑しい職業と貴い職業がある (*hīnañ ca kammaṃ ukkaṭṭhañ ca kammaṃ*)。卑しい職業とはコッタカ業 (*koṭṭhakakamma*)⁽⁵⁾、清掃業 (*puppha-chaḍḍakakamma*) で、諸ジャナパダにおいて (*janapadesu*)、……これらを卑しい職業と名づける。貴い職業とは農耕 (*kasi*)、商売 (*vāṇijjā*)、牧畜 (*gorakkhā*) で、諸ジャナパダにおいて (*janapadesu*)、……これらを貴い職業と名づける。 *Vinaya* 「波逸提002」 (vol.IV p.006)

〔職人の〕技術に2つの技術がある。卑しい技術と貴い技術とである (*hīnañ ca sippaṃ ukkaṭṭhañ ca sippaṃ*)。卑しい技術とは、葦細工技術 (*naḷakārasippaṃ*)、陶工技術 (*kumbhakārasippaṃ*)、織工技術 (*pesakārasippaṃ*)、皮革工技術 (*cammakārasippaṃ*)、理髪技術 (*nahāpitasippaṃ*) で、諸ジャナパダにおいて (*janapadesu*)、……これらを卑しい技術と名づける。貴い技術とは、ムツダ (*muddā*、指算)、ガナナー (*gaṇanā*、連算)、書 (*lekhā*)⁽⁶⁾ で、諸ジャナパダにおいて (*janapadesu*)、……これらを貴い技術と名づける。 *Vinaya* 「波逸提002」 (vol.IV p.006)

このようにジャナパダの生活は、さまざまな職業の人が混在することによってこそなりたつわけである⁽⁷⁾。

- (1) 『国家の起源と伝承』 (pp.122-123) に、大規模な土地施与を受けたバラモンを「マハーサーラ (富豪)」と形容される、という。
- (2) 中村元『インド古代史 (上)』 (p.340) によれば、西紀前6世紀頃、新たな階級として「ガハパティ (*gahapati*)」、すなわち富裕な資産者たちが出現してきた、とされる。
 なおパーリの原始仏教聖典には「大富豪なるクシャトリヤ (*khattiya-mahāsāla*)」と「大富豪なるバラモン (*brāhmaṇa-mahāsāla*)」とに続いて、「大富豪なるガハパティ (*gahapati-mahāsāla*)」という表現があり、このような富裕なクシャトリヤ・バラモン・ガハパティを伝える聖典には *DN.016 Mahāparinibbāna-s.* (「大般涅槃經」 vol.II p.146)、*DN.017 Mahāsudassana-s.* (「大善見王經」 vol.II p.169)、*DN.033 Saṅgīti-s.* (「等誦經」 vol.III p.258)、*SN.003-001-003* (vol.I p.071)、*SN.003-001-007* (vol.I p.074)、*AN.007-007-062* (vol.IV p.100)、*AN.007-007-068* (vol.IV p.129) などがある。さらにパーリ聖典には「大富豪なるクシャトリヤの家 (*khattiya-mahāsāla-kula*)」「大富豪なるバラモンの家 (*brāhmaṇa-mahāsāla-kula*)」「大富豪なるガハパティの家 (*gahapati-mahāsāla-kula*)」と、富裕なクシャトリヤ・バラモン・ガハパティの家 (*kula*) と伝える聖典もある。そうした聖典には *MN.129 Bālapaṇḍita-s.* (「賢愚經」 vol.III p.177)、*SN.003-003-001* (vol.I p.094)、*AN.004-009-085* (vol.II p.086)、*AN.006-006-057* (vol.III p.386)、*AN.010-021-205* (vol.V p.290) などがある。
- (3) ダルマストラ類によれば、バラモンは司祭者、クシャトリヤは王侯、ヴァイシャは牧畜、農業、商業と規定されていて、社会の経済的基盤である牧畜、農業、商業の担い手はヴァイシャとされている。 *Manusmṛti* 1-90、8-410、10-79 など。渡瀬信之訳『マヌ法典』 (中公文庫780 中央公論社 1999) p.035、p.288、p.351 を参照。

しかしガンジス河中下流域では、上記のようなヴァルナによる職業の専門化の傾向はなくなっていた。例えば、ヴァイシャの職業とされる農耕、牧畜、商業がガハパティの職業に挙

げられているし、農村に住むガハパティには自ら耕作に従事する者もいた。むしろ上記のダルマストラ類で説くようなヴァルナによる職業の区分は希薄となり、当時は資産家と庶民という階級の差が生じてきた。つまり社会の経済基盤を担う庶民の中から、大土地所有者・商業資本家であるガハパティという階級が社会的な勢力として台頭し、例えば村長などに相当するような地位を占めるようになっていたのである。AN.008-006-054 (vol.IV p.281) には「クラプッタ (*kulaputta*、善男子) がもしも農業、商業、牧畜……で生計を立てるとすれば (*kulaputto yena kammaṭṭhānena jīvikam kappeti yadi kasiyā yadi vaṇijjāya yadi gorakkhena*……)」とあって、*kulaputta* としている。*kulaputta* はしばしばガハパティ家の子女を指す場合があると指摘されている(山崎元一『古代インド社会の研究』p.185)が、ここでも本文中の他の箇所では「ガハパティあるいはガハパティの子どもたち…… (*gahapati vā gahapatiputtā vā*……)」(p.282)と述べていたり、偈の箇所では「ガハッターナ (*gahaṭṭhāna*、在家者)」(p.285)ともあるので、上記の *kulaputta* とは、ガハパティを指していると理解できそうである。

また上記の註(2)で示したように、土地の施与を受けて土地所有者となった富豪なバラモンとか、あるいは富裕なガハパティ (*gahapati*) が登場してくる。すでにクシャトリアとバラモンとの順位がバラモン文化圏とでは逆転していることは上述した通りであるが、ここにガハパティがヴァイシャに交代してバラモンの次位に位置づけられているのは、当時の商業経済の発展を示す顕著な傾向であると言えよう。これについては、中村元『インド古代史(上)』p.340以降、並びに山崎元一『古代インド社会の研究』p.181以降を参照。

- (4) 仏教の基本的な立場は、生れや職業に対する貴賤の観念には否定的であると言えよう。例えば、*Suttanipāta* 003-009 (p.122) には「生れにより婆羅門ではない。生れにより非婆羅門でもない (*na jaccā brāhmaṇo hoti, na jaccā hoti abrahmaṇo*)。行為によって婆羅門である。行為によって非婆羅門である (*kammanā brāhmaṇo hoti, kammanā hoti abrahmaṇo*)」とか、あるいはまた「行為によって農夫である (*kassako kammanā hoti*)。行為によって職人である (*si-ppiko hoti kammanā*)。行為によって商人である (*vāṇijo kammanā hoti*) ……」などと説かれている。しかしここに引用するように、従来の農耕・牧畜に加えて、この時代に大きく進展した商業を貴い職業としたり、さらに指算や計算や書が貴い技術とみなされていることも事実であって、商業活動を重んずる一方で、コッタカ業や掃除業、あるいは葦細工や陶工や織工などの、いわばサービス業や職人の技術に対して低い評価がなされていると言えよう。このような職業観は当時の社会的・経済的な情勢を反映するものであろうし、ひいては仏教の経済的な支持基盤を示唆するものでもあると考えられる。
- (5) *Samanta-pāsādikā* (vol.IV p.739) には「‘コッタカ業’とは、大工業である (*koṭṭhaka-kamman ti tacchakakammam*) とある。
- (6) *Samanta-pāsādikā* (vol.IV p.739) には「‘ムッタ’とは、指算である (*muddā ti hattha muddāgaṇanā*)。‘ガナナー’とは、連算など、指算以外の諸計算方法である (*gaṇanā ti acchiddakādi avasesagaṇanā*)。‘書’とは、字の書写である (*lekhā ti akkharalekhā*)」とある。
- (7) 山崎元一『古代インド社会の研究』pp.174~175を参照。しかも当時の商業や手工業にはセーニ (*seni*)、プーガ (*pūga*) と呼ばれる職業団体も形成されていたという。中村元『インド古代史(上)』p.349以降、山崎元一『古代インド社会の研究』p.176を参照。

[2-3] これまた当然のことであるが、ジャナパダに住む人たちにはさまざまな氏姓 (*gotta*)⁽¹⁾、名前 (*nāma*) があった。すでに上記で紹介した資料(本章【3】[2][2-1])の中では、ジャナパダ第一の女性を捜し求めている男性に、人々がその女性の名前と氏姓⁽²⁾を尋ねている。

ところで氏姓に関しては、

氏姓に2つの氏姓がある。卑しい氏姓と貴い氏姓とである (*hinañ ca gottam ukkaṭṭhañ ca gottam*)。卑しい氏姓とはコーシヤ氏姓 (*Kosiyagotta*)⁽³⁾、バーラドゥヴァージャ氏姓 (*Bhāradvājagotta*)⁽⁴⁾ で、諸ジャナパダにおいて (*janapadesu*)、軽侮卑蔑され、尊敬されないもの、これらを卑しい氏姓と名づける。貴い氏姓とはゴータマ氏姓 (*Gotamagotta*)⁽⁵⁾、モッガッラーナ氏姓 (*Moggallānagotta*)、カッチャーナ氏姓 (*Kaccānagotta*)、ヴァーシッタ氏姓 (*Vāsiṭṭhagotta*)⁽⁶⁾ で、諸ジャナパダにおいて (*janapadesu*)、軽侮卑蔑されず、尊敬されるもの、これらを貴い氏姓と名づける。
Vinaya 「波逸提 002」 (vol.IV p.006)

というものがある。

また名前に関しても、

名前に2つの名前がある。卑しい名前と貴い名前とである (*hinañ ca nāmaṃ ukkaṭṭhañ ca nāmaṃ*)。卑しい名前とはアヴァカンナカ (*Avakaṇṇaka*)、ジャヴァカンナカ (*Javakaṇṇaka*)、ダニッタカ (*Dhaniṭṭhaka*)、サヴィッタカ (*Saviṭṭhaka*)、クラヴァッダカ (*Kulavaḍḍhaka*)⁽⁷⁾ [等の名前があり、そうした名前は] 諸ジャナパダにおいて (*janapadesu*)、軽侮卑蔑され、尊敬されざるもの、これらを卑しい名前と名づける。貴い名前とは仏と結ばれ、法と結ばれ、僧と結ばれ、諸ジャナパダにおいて (*janapadesu*) 軽侮卑蔑されず、尊敬されるもの、これらを貴い名前と名づける。
Vinaya 「波逸提 002」 (vol.IV p.006)

とされている。

- (1) 『国家の起源と伝承』 (p.060) に、さまざまな集団を特殊な親族集団によって統合しようとする動きのなかでは、ゴートラに関する言及が最も多い、後代の文献によると一部のクシャトリヤ—アンダカ=ヴリシュニ族、シャーキヤ族、リッチャヴィ族などがゴートラ名を採用し、氏族の内部の家族を区別した、などと述べている。
- (2) 名前や氏姓に対応する漢訳では、「其姓^字」(『長阿含』028「布吒婆樓經」大正01 p.111下、『長阿含』026「三明經」大正01 p.105下)、あるいは「如是姓。如是名。如是生」(『中阿含』208「箭毛經」大正01 p.784下、『中阿含』209「鞞摩那修經」大正01 p.786中)とする。氏姓 (*gotta*) は「姓」、名前 (*nāma*) は「字」もしくは「名」と漢訳されているが、これに加えて『中阿含』では「生」という文字がある。これは、恐らくジャーティ (*jāti*) の翻訳と推定される。
- (3) *Pāṇini 4-1-106* (p.200) に「カウシカ (*Kausika*) 」とある。なおテキストの頁は *Bhāṣā-vṛtti [A Commentary on Pāṇini's Grammar]*, by Purushottamadeva, edited by Swami Dwarikadas Shastri, Ratna Publications, Varanasi (1971) である。吉町義男訳『サンスクリット古典梵語大文法—インド・パーニニ文典全訳』 (p.310) 参照。
- (4) *Pāṇini 4-1-117* (p.201) に「バラドゥヴァージャ (*Bharadvāja*) 」 [部族名] とある。『サンスクリット古典梵語大文法』 (p.317) 参照。
- (5) *Pāṇini 2-4-65* (p.096) に「ゴータマ (*Gotama*) 」とある。『サンスクリット古典梵語大文法』 (p.209) 参照。
- (6) 同上書の同一偈に「ヴァシシュタ (*Vasiṣṭha*) 」とある。
- (7) *Samanta-pāsādikā* (vol.IV p.738) によれば「‘アヴァカンナカ等々’とは、ダーサに属する人々の名前である。それ故に卑しいのである (*Avakaṇṇakādi dāsānaṃ nāmaṃ hoti tasmā hinaṃ*) 」とする。

[3] 上記のように、ジャナパダという言葉は部族の人々が足を踏み入れ、日常生活を送る場を表す。したがって個々のジャナパダには、それぞれの言語や生活慣習・風習あるいは祭儀が形成されており、またジャナパダはさまざまな階級や職業を持つ人々によって成り立っていた。端的に言えば、それぞれのジャナパダにはそれぞれの文化が形成されていたということであって、それはけっして普遍的・形式的なものではないということができる。

すなわちジャナパダは、地縁・血縁によって結びつけられた自然形成的なゲマインシャフト的なものであったということができる。これに対してラッタは政治的・人為的に形成されたゲゼルシャフト的なものであって、したがってラッタはジャナパダを人為的に分断する場合も、あるいは異質なジャナパダを統合する場合もありうるわけであって、ラッタという言葉の背後には上述したような意味での文化的なものはないということになる。